

【フランス語】

フランス語人になるための最初の一步

「六角形の国」フランス

フランス語というと、みなさんは何を思い浮かべるだろうか。多くの人にとって、それはフランス共和国——西ヨーロッパに位置するフランスの国土——であろう。同国は EU で最大の国土面積をもち、西は北海、英仏海峡、大西洋、南は地中海に接する約 5,500 km の海岸線に囲まれている。それがきれいな六角形を描いていることから、フランス人は自国のことを「レクザゴン(l'Hexagone)」、すなわち六角形の国、との愛称で呼ぶことが多い。

フランスときくと、文化・芸術のイメージがまず浮かぶだろう。首都パリにはルーヴル美術館、オルセー美術館をはじめ世界的に有名な美術館が立ち並んでいる。また五大洲 38 都市の特徴を文化・芸術面から記述した世界都市文化フォーラム (World Cities Culture Forum, <http://www.worldcitiescultureforum.com>) の 2018 年度報告書によれば、世界一を記録した 2015 年度と同様、パリは映画館数、映画入場者総数でも世界トップクラスを誇る。パリ首都圏 (イル＝ド＝フランス地方) は人口 1220 万と東京都の人口を一割強下回るが、そこに 297 の美術館・博物館、836 の劇場、1047 の公立図書館が設置されている。またフランス全体では 53 件の文化・自然遺産がユネスコ世界遺産に登録されている。

このようにパリを中心とした文化・芸術のイメージが強いが、フランスは世界第七位の経済大国でもある (IMF 統計より、2023 年の世界の名目 GDP・実質 GDP を参照)。なかでも農業部門は活発で、EU 最大 (18%) の生産額をほこる。また工業部門は農産食品産業、自動車産業、建設産業、化学工業、鉄道産業、航空宇宙産業、エネルギー産業、医薬品・化粧品産業などが発達している。さらに高級品部門と観光産業は世界的に知られており、世界最多の観光客数をほこる観光大国だ。日本との関係でいうと、フランスは対日投資国として世界第八位 (日本貿易振興機構ウェブサイト「ジェトロ対日投資報告 2023」を参照)、進出企業数約 400 社、日本での雇用数が 6 万人を超える。逆に日本にとってフランスはユーロ圏において最大の投資国であり、進出企業数 750 社以上、フランスでの雇用数は累計 10 万人を超える (以上、外務省ウェブサイト「フランス共和国基礎データ (2024 年 9 月現在)」を参照)。このように文化だけでなく、ビジネスの面でも日本とフランスの関係はなかなか強いのである。

世界中に広がるフランス語圏

だがフランス共和国の国土は、ヨーロッパ大陸西部に位置する「六角形」だけではない。同国は、おびただしい数の島を含む「海外領土」を世界中に保持している。北アメリカ沖にはグアドループ、マルティニク、サン＝ピエール・エ・ミクロン、サン＝マルタン、サン＝バルテルミ、太平洋にはフランス領ポリネシア、ヌーヴェル＝カレドニー (ニューカレドニア)、ワリス・エ・フトゥナ、クリップートン、インド洋にはレユニオン、マイヨット、エパルス諸島、クロゼ諸島、ケルゲレン諸島、サン＝ポール、アムステルダムなどのフランス領の島があり、また南アメリカ大陸にフランス領ギアナが、南極大陸にフランス領南方・南極地域がある。ぜひ一度、世界地図で場所を確認してほしい。これらはフランスの国土であり、そこではフランス語が公用語として話されている。

またフランス語は、フランス本国だけではなく、アフリカ大陸、ヨーロッパ、北米にまたがる 30 近くの国々で公用語として用いられている。さらに準公用語としてフランス語を採用している国々もあわせると、その数は 50 ヶ国にもおよび、約 2 億 5000 万もの人々が共有する言語なのである。

このような「フランス語圏」の世界的な広がり、フランスが 16 世紀から 20 世紀にかけてイギリスとならぶ植民地帝国として、世界の様々な土地とそこで暮らす人々を支配してきたという歴史に起因するものである。しかし同時にこれらの様々な地域でフランス語

が話されている、ということがフランス語をより豊かなものにし、その可能性を広げていることも事実である。こうしてみると、フランス語は思った以上に世界の広い領域で「使える」言語なのである。

フランス語人 (les francophones)

その一方で、文化的多様性は「六角形」のフランス内部にも存在する。「六角形」のなかには、歴史的にブルターニュ、アルザスをはじめとする地域の少数文化・少数言語が多く存在し、公教育の対象となっているものだけでも8つの地域言語がある。またフランスは産業化の進んだ19世紀半ばより外国人の移住が継続的にすすみ、ヨーロッパのなかでも有数の移民大国として知られる。2012年の調査では自分自身、または親が外国からの移住者であった人は1200万、国民の二割に達する。出身地は多岐にわたるが、旧植民地だった北アフリカとサブサハラアフリカが多い。なかでも1962年にフランスから独立するまで130年以上フランス国土に組み込まれてきたアルジェリア出身者が最大多数を占める。そのような事情も手伝って、フランス人口の約8%をイスラム教徒が占めると言われる。現行のフランスの国籍法では、フランス生まれの外国人は成人(18才)になると自動的にフランス国籍が付与される仕組みになっており、したがって在仏イスラム教徒の多くがフランス国籍者である。

このように多様化したフランス人に共通する要素、それが「フランス語を話す」ということである。もともとのフランス系であろうと、移民の子孫であろうと、フランスで暮らすにはフランス語が必要だ。フランスで生まれ育った人は、よほど特殊な条件がない限り、フランス語を身につける。つまり、彼らにとってはフランス語が母語となる。

フランス人はフランス語を話すが、フランス語を話す人すべてがフランス人というわけではない。フランス人のフランス語が唯一絶対ではないという考え方も浸透しつつある。フランス語表現文学という概念も生まれた。非フランス人によるフランス語の文学が注目を集めているのである。フランス語はフランス人の独占物ではなく、フランス語を用いるすべての人のものである。フランス語を話す人は、みんな「フランス語人」である。そして、フランス語人となるためには、先天的な条件は必要ない。確かに、フランス語を母語としない人にとっては厳しい道のりではあるが、努力を積み重ねればフランス語を習得することができる。今、日本語で書かれたこの文章を読んでいるあなたも、労力を惜しまなければフランス語人になれるのだ。

フランス語を学ぶ効用

現在の日本では、外国語教育は英語一本に絞ればよい、という考え方が広まっており、大学でも第二外国語を必修から外すところが増えてきた。本学でも、2016年度入学生から経済学部、商学部は第二外国語を必修科目から外し、法学部、社会学部のみが必修という体制に移行した。もちろん、商学部・経済学部の学生も、第二外国語科目を任意で履修することができる。法学部・社会学部の学生と同じように「初級(総合)」のⅠとⅡを履修してもよいし、半分の時間で学べる「初級(速修)」を履修してもよい。

英語を習得することは大切である。しかし、英語の重要性が増しているからといって、英語以外はいらないというわけではない。むしろ英語のグローバル化がすすみ、英語を話せることが世界的に「当たり前」となっている現在、英語だけ学べばいい、という考え方自体では競争に勝てない。特に日本社会のエリートであり、将来的に各方面でグローバルに活躍することが期待される本学の学生だからこそ、「英語プラスワン(あるいはそれ以上)」の発想をもって、勉強に取り組んでほしい。

第二外国語を学ぶことは、ものの見方を広げるのに役立つ。日本で生まれ育った人は、まず日本語を母語として身につける。ついで、最初の外国語として英語を学ぼう。英語と日本語はずいぶん違う。異質な世界を知ることは非常に重要である。しかし、異質な世界を英語だけに代表させてしまうのは危険だ。第二外国語は、日本語でも英語でもな

い世界への扉を開いてくれる。大袈裟に言えば、二項対立でものごとを見る弊害を免れることができる。少なくとも三つの視点を持てば、欧米では云々というお決まりの議論がしばしばアメリカの事情のみを勘案しており、そこから「欧」（ヨーロッパ）がすっぽり抜け落ちていることにも気づくだろう。

第二外国語の学習には、新しいことへの挑戦という意味もある。あなた方には、すでに英語という「建物」を組み立てた経験がある。もしかすると少々建付けが悪いかもしれない。補修をするに越したことはないが、どこをどういじってよいやら途方に暮れてはいないだろうか。気分転換に、斜向かいの更地にもう一軒小屋を建ててみてはどうだろう。完成品のイメージは頭の中にあるはずだ。英語を始めたときは耳の訓練が不十分だったから、今度は視聴覚教材を積極的に活用しよう、といったやり直しが利く。過去の反省を活かす絶好の機会である。

フランス語は長らく西洋文化の中枢を担う言語だった。フランス語で表現された文化遺産は、人類全体にとっても貴重である。17世紀のデカルトやパスカルにはじまり、フランス革命の思想的背景となったルソーや百科全書派の思想、バルザック、ゾラ、プルーストなどによる19-20世紀の傑作小説群、そして1960年代以降の先端的な哲学・思想。このようにフランス語ができるようになれば、フランス語で表現された世界を自分のものにできる。人生の幅が広がることはまちがいない。

フランス語を学ぶことは、構造のよく似た英語の能力を向上させることにもつながる。例えば高校で英語の仮定法を学んだときに、苦労した覚えはないだろうか。「仮定法」とは *the subjunctive mood* の訳だが、フランス語で *le subjonctif* と言えば「接続法」と訳される法になる。フランス語ではこのほかに、いわゆる非現実話法——英語の仮定法が受け持つ話法——のために「条件法」(*le conditionnel*)がある。つまり、英語では仮定法としてしか現れない語学的事象は、フランス語では条件法と接続法のふたつに分けられているわけである。なにか面倒に見えるだろうか。そうではない。むしろフランス語の方が個々の場合がきちんと区別されているために、英語の仮定法のような曖昧さがないのだ。英語なら助動詞の過去形でさまざまな意味を示さなければならないのに、フランス語では異なる法と時制を使うことでもっと明確に表現できる。そして、こうしたフランス語の知識を身につけてから英語の仮定法を眺めると、その意味するところが前よりはっきり分かるようになる。実際、歴史的に見れば、英語はさまざまな語彙や言い回しをフランス語から借りることで発展したのである。将来英語を仕事で使おうという人にはフランス語がお勧めである。

日本語と英語のほかにフランス語ができれば、フランス（ヨーロッパ）からの情報を受容できるうえに、ものの考え方が三極構造となり、複眼的な見方ができるようになるだろう。つまり、母語と国際語（英語）に加えて第三の言語を知ることによって、ものごとを相対化する能力を手に入れることができるのだ。これはあなた方が将来なるであろう高度な職業人にとって、なによりも重要な能力ではないだろうか。フランス語を第二外国語として学ぶ意義は確かに存在するのである。

目標 900 時間

アンドレ・ジッド (André Gide) は、ピアノの練習は進歩が実感できるから好きだと言い、外国語を学ぶ楽しみも同じだという感想を述べている。一般に、何らかの技能を身につけるためには時間をかけなければならないが、ピアノが弾けるようになるには 1000 時間の練習が、外国語を身につけるには 900 時間の学習が、それぞれ必要だという。

計算してみよう。一橋大学で必修科目としてフランス語を選択すると、週に2コマのクラス制授業があるので、ちゃんと出席すれば週当たり3時間半フランス語を学ぶことになる。大学の授業は年に正味26週しかない。ということは、本学の一年生がフランス語初級の授業に皆勤したとしても、それだけでは学習時間は91時間にしかないのである。目標の十分の一にしかない。絶望的な数字だ。

しかし、ここで諦めてしまっても、いつまで経っても外国語は身につかない。クラス制授業で不足する分は、工夫して補えばよい。それに規定では、ひとつの授業に対し、その2倍の予習・復習がセットになってはじめて単位認定がなされることになっている。つまり授業だけでなく、予習と復習をすることをそもそも大学は前提としてカリキュラムを組んでいるのである。

具体的にはまず、フランス語を母語とする教員が担当する「フランス語初級（実践）」を積極的に履修しよう（2024年度は2人の先生が授業を開講）。次に、日頃の予習復習を欠かさないようにしよう。予習と復習のいずれに重点を置くかは、自分が教わる先生の方針に合わせればよい。とりあえず、授業と同じ時間だけ、自主的にフランス語を勉強してみよう。東2号館3階の東学習図書室内にはLL自習室があり、自習環境も整備されている。積極的に活用してほしい。また、NHKのフランス語講座を利用するのも手だ。フランス語をシャワーのように浴びたい向きにはインターネット・ラジオがおすすめだ。有名なのはラジオ・フランスの国際放送（Radio France Internationale）だが、ニュース専門局のフランス・アンフォ（France Info）が学習に向いている。この放送局では一時間に4回フラッシュ・ニュースを流すのだが、ニュース原稿はそれほど頻繁には差し替えられないから、同じニュースを繰り返し聞くことができる。<http://www.ecouter-en-direct.com/radio-france-info/>のページに飛んで、再生ボタンをクリックしてみよう。文字がないと不安という人には、ラジオ・フランスのホームページの **Le Journal en français facile**（簡単なフランス語でのニュース）というコーナーがお勧めだ。スクリプト付きのニュースを聞くことができる（<http://savoirs.rfi.fr/fr/apprendre-enseigner/langue-francaise/journal-en-francais-facile>）。文化放送専門局としては、フランス・キュルチュール（France Culture）が挙げられる（<https://www.radiofrance.fr/franceculture>）。美術・映画・音楽・哲学などを扱う多くの番組にここで触れることができる（オンデマンド配信あり）。フランス語音声の再生速度は変更可能なので、皆さんの学習進度に応じて適宜変更していただければと思う。ちなみにニュース放送専門局のフランス・アンフォと文化放送専門局のフランス・キュルチュールの関係は、日本のNHK総合テレビと教育テレビの関係に、あるいはNHKラジオ第1とラジオ第2の関係にほぼ等しい。また、フランスのテレビ局フランス2（France 2）のホームページでは同局のニュース番組をまるごと見ることができる（<http://www.francetvinfo.fr/replay-jt/france-2/20-heures/>）。分からなくても構わない。最初は雰囲気だけ味わえばよい。さらに、夏休みなどの長期休暇中にも週6時間为目标にフランス語と接するように心がけてみてはどうだろう。これなら一年で300時間ほど稼げる。目標の三分の一である。滑り出しの一年としては悪くない。気をつけていただきたいのは、授業をサボれば学習時間が減ることだ。当たり前のことではあるが。

2019年度からは、全学共通教育科目の枠で「フランス語短期海外語学研修」プログラムが本学で始動する。フランス政府がフランスの高等教育機関への留学を促進するために設置した「キャンパス・フランス（Campus France）」の短期語学留学プログラムと連動するもので、高度なフランス語運用能力を習得する機会として活用してもらいたい。「フランス語短期海外語学研修」に参加する学生へのオリエンテーションを目的とした「フランス語中級（短期海外語学研修準備）」の授業も新たに設けられているので、シラバス等をよく参照の上、学習計画に組み込んでみてはいかがだろう。

受信と発信

日本とフランスを結ぶ飛行機に乗ると、客の大部分が日本人であることに気づく。つまり、日本人がフランスへの行き帰りに利用することが多く、フランス人はそれほど日本に来ないのである。また、日本の主な大学の図書館にはフランス語の書籍がふんだんにあるが、フランスの国立図書館には日本語の書物はあまり収蔵されていない。留学生の数を比

較しても、日本の大学に正規に在籍しているフランス人の数に対して、在仏の日本人留学生はその何十倍にもものぼるはずである。近年、日本の漫画やアニメの流行もあって是正されてきたが、それでも歴史的に見れば日仏間の交流はかなり偏っている。フランス人にとっての日本は、日本人の間でフランスへの関心がそれなりに高いのに比べると、まだまだ身近な存在とは言えない。多くのフランス人を日本に呼べるとよいのだが、こちらから積極的に日本を知ってもらうよう努力することも重要である。

言葉は受信と発信の両方に役立つ。日本人がフランス語を学ぶ場合、フランス語で表現されたものを受け止めようという意図から発していることが多いが、これからはフランス語圏に向けて表現することも怠ってはならない。フランス人に日本語を教えるとともに、フランス語による日本紹介を推進しよう。及ばずながら、私たちも力をつくしたいと思っている。

発信に向けた努力は、徐々に実を結びつつある。1997 年、エッフェル塔 (la Tour Eiffel) の近くにパリ日本文化会館 (la Maison de la culture du Japon) という施設がオープンし、様々な角度から日本文化を紹介している。近年、箱もの行政への批判が高まっていることから分かるように、立派な施設を作ってもそれを活かすプログラムを持続的に提供できなければ、単なる無駄遣いに終わってしまう。フランス人のイメージに添う形で伝統文化を紹介するだけでなく、日本の実情を多面的に見せる取り組みが求められているが、優れた企画はフランス文化に通じた人でないと出せるものではない。その意味でも、フランス語の運用能力が重要になって来る。

最初の一步

あれこれ理屈をつけてフランス語の宣伝をしてみたが、最初の一步を踏み出してもらわないことにはどうにもならない。フランス語のことわざに “Il n'y a que le premier pas qui coûte.” というのがある。夏休み前には分かるようになっているはずだが、もったいぶらずに説明すると「大変なのは最初の一步だけ」という意味である。いやいや勉強するより楽しんだ方がよい。与えられた条件で人生を楽しむのは、フランス人の得意とするところだ。フランス語を通じてその秘密に少しでも触れられるなら、それこそもっけの幸いではないか。